世田谷村日記

石山修武

四月一日

眠れず、二時半に起きてしまう。建築の事しか考えたくないなもう。他のことは全てわずらわしい。体がいつまで持つか時間との勝負に入っているから、これからは。随分乱暴な暮しをして来たしそれで年取ってから大変だろうと思っていたが、やっぱり大変だ。狙いを絞ってエネルギーを拡散しない様に生きてゆかなきゃならないね。それを肝に命じたい。

私の場合どうしても建築の事だけの、その建築世界がハナからどうやら拡散しているので、色んな困難さに対面してしまう。それにジタバタしないでゆっくりやらなきゃいけない年になっているのだが、ジタバタが体にしみついているんだ、もう。三時、又眠ってみよう。眠れればいいんだけれど。こんな事を努力しなければならくなるとは想像もしてなかった。

朝九時より打ち合わせ続く。聖徳寺現場が動いたのが救い。日用雑貨品を本格的に動かし始めた。スケッチを猛然とする。スタッフに期待しては駄目だ。十九時半毎日新聞佐藤健六車編集委員を伴って現われる。毎日新聞阿弥陀の道のポスター持参。病状を詳細に説明してくれる。どうなるか全く分からないがキチンと附合ってゆくしかない。西域の旅は無理だと再び言うが、覚悟の上だから止めぬと言う。

私にとっても初めての事態に対面しているのを痛感する。佐藤健としたら一日一日の重みを痛烈に感じ取っているのだろう。もう冗談、ジョークが通る場合ではないが、これ以上ない深刻な事態との対峙は笑いしかないのじゃないか。と覚悟した。栄寿司で一緒にすし喰った。家内も同行。こういう時の家内は肝が座っているから明るい。堂々たるもんだ。流石酒豪で鳴らした六車氏も神妙であった。

私も覚悟の上でキチンと附合っていこう。二十一時過、六車氏佐藤健を自宅まで送り届ける。二十二時家内と帰宅。ひどく疲れてすぐに休む。グッタリと泥のように眠った。

四月二日

朝六時起床。今日は日用雑貨集中デザインの日。エネルギーをたぎらせよう。考えてみれば究極の家のプロジェクトは佐藤健がこんな事になるとは思っていなかったのに、予見的なプロジェクトであった。そう考えてみるならば我孫子の酔庵、花咲かハウスプロジェクト、そして究極の家計画、松崎町の倉と、私は佐藤健の為に四つも建築を考案工夫していたことに気付く。驚くべき事ではある。鈴木博之の椅子と悪戦苦闘しているのと同様なのだ。

良く考えてみよう。我ながら遊び、冗談でやっているんだと考えて、遊んでいたプロジェクトが意外や意外、深い意味を持っていたのだ。遊び、とはなにか。商売ではないと言う事。金がまつわり難いという事ではないか。マイノリティの為のデザイン、近代デザインの治療、修理の意味合いだけではそれこそ近代的な思考の枠にはまってしまうのではないか。これは深く遊び、遊ぶ、金銭の授受、贈与の問題と結びついているな。無意識にやっていた遊びの価値について考えてみる必要がある。「究極の家」を再考してみる。

十時前星の子愛児園。近藤理事長とお目にかかる。理事長の強

いサポートがなければこの建築はできなかった。コルビュジェとサンテグジュペリを融合させてみよ、こんな依頼には私はふるい立つのだ。子供たちの遊ぶ姿が似合っているかどうか、大丈夫だと思う。この建築で私は一歩前に進んだ。細かいところに多くの傷はあるが全体としては前進した。

十五時黒田太田八頭司親子来宅。屋上その他案内する。お茶を供して、すぐに星の子愛児園見学へ。安藤同行させる。遠方からの客だ。大変だけれど素直に大事にしよう。

いくつかの生活用品私のスケッチをもとに若い学生達にすすめさせる。

夜十二時まで仕事する。

明日は学校。新入生オリエンテーション。地下は二、三日は戦闘状態に持ち込み、週に一日はゆっくりさせよう。生活にはリズムが必要だと言うのを痛感させなくては。